

2022年4月23日

## 2021年度 総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類 ※該当する( )に ○を付ける	・共同研究 ( )      ・個人研究 (○)	
研究代表者 (所属・職・氏名)	文芸学部 教授 浦野郁	
研究課題名	現代イギリスにおけるチャリティ研究	
研究分担者氏名	所属・職	役割分担
研究期間	2021年4月1日 ～ 2022年3月31日	

### 研究実績の概要 (1)

#### 【研究の目的】

2019年度に総合文化研究所の助成を受け、「現代イギリスにおけるチャリティ、ボランティア精神に関する研究」を行った。イギリス・ダラム市では実際に行われているチャリティ活動のいくつかを調査し、携わった人々に話を聞くことが出来たが、その際に街のあちらこちらでより多くの活動を目にした。現代イギリスにおけるチャリティ実践の規模を知るためには、さらに多様な例を詳しく取り上げ、より多くの人々から話を聞く必要があると感じた。再度の現地調査を経てより多くの実践例を提示することで、チャリティ大国としてのイギリスを分かりやすく発信していきたい。また、新型コロナウイルスの流行に伴い、イギリスは日本よりも厳しい状況に置かれている。コロナによって人々の「寄り添い」や「繋がり」を重視する活動が苦境に陥っていることは国内でも報道されているが、イギリスにおけるチャリティの形を変えていくのかどうかについても注視し、考察していく。

#### 【研究計画の変更】

2021年度もコロナ禍によって渡航のリスクが大きい状態が続いたため、現地調査中心の研究計画を変更し、元々の専門分野であるイギリス文学におけるチャリティの描かれ方を検討することで、その文化的意義について探ることとした。

#### 【研究実績の概要】

イギリス文学において慈善行為や博愛精神への言及は驚くほど多く、19世紀中頃までは事実として

## 研究実績の概要（２）

淡々と述べられるか、登場人物らが社会的義務を果たす場として肯定的に描かれることが多い。しかし19世紀半ば頃を分岐点にして、そこに懐疑的、批判的な視点が見え隠れし始め、この傾向は20世紀に入っても続くことが分かった。著名な作家・作品の例をいくつか挙げれば、Charlotte Brontë, *Jane Eyre* (1847)では、主人公が慈善学校で教師を務める様子から主人公の内に根付く社会的義務の感覚や基本的な善性が描かれる一方、ローウッド慈善学校の劣悪な環境や偽善性も描かれる。Charles Dickensは*Oliver Twist* (1837-39)で公的な救貧政策がうまく機能しない様子を描きつつ、*A Christmas Carol* (1843)では個人の善意と寄付・贈与行為が社会格差を埋める可能性を描く。しかし*Bleak House* (1851)では慈善活動にのめり込み家庭を顧みない人物や、対象への共感に欠けビジネスライクに慈善を遂行する人物を通じて、慈善に懐疑的な眼が向けられているようだ。また、Joseph ConradやRudyard Kiplingの作品には、博愛主義的な理念の下に押し進められた帝国主義のもと諸問題が描かれ、これらもイギリスにおける慈善・博愛の伝統を検討し直すものと言えるだろう。さらに20世紀に入るとヴィクトリア朝期の価値観から距離を取ろうとする思潮の中で、この方向性はより明確になり、チャリティは一層戯画化され批判的に描かれるようになっていく。

こうした実態がある一方で、この時期の文学作品がチャリティをどのように描いてきたかについてはまだ十分な研究がなされているとは言えず、Christianson, *Philanthropy in British and American Fiction* (2007)、Christianson and Murphy eds., *Philanthropic Discourse in Anglo-American Literature, 1850-1920* (2017)、Radeva-Costello, *Philanthropy and Early Twentieth-Century British Literature* (2019)等の研究書が徐々に出版している段階である。特にRadeva-Costelloの著書は、20世紀への転換期で慈善の在り方は変節を迎えたという見方に立ち、自由主義から福祉国家への転換、大英帝国の終焉、女性の社会進出など、背後にある様々な社会的要因を指摘しつつモダニズムとフィランソロピの関係を問い直しており、多くの示唆を与えてくれた。

また、近年文学研究の場で注目を集めるトピックとして、「ケア」の問題があり、2021年にはイギリス文学研究者でもある小川公代氏の著書『ケアの倫理とエンパワメント』がベストセラーになっている。必ずしも経済活動に結びつくことのない、育児や介護に代表される「ケア」の価値を見直そうとする姿勢は、金銭的見返りを期待せずに従事するチャリティ活動を考える上でも重要な視座を与えてくれるように思われる（実際、小川氏は著書の冒頭で*Jane Eyre*の新たな読みの可能性に触れている）。「ケアの倫理」とチャリティの倫理及び実践がどのように切り結ぶのかという点に関して、現在も考察を続けている。

#### 研究発表(印刷中も含む)雑誌および図書

期間中に研究内容を大きく変更したため、成果は 2022 年度に刊行される総合文化研究所紀要にて発表する予定である。

また、本研究課題にはさらに長期に渡る研究調査が必要であると感じ、上記の内容をまとめて 2022 年度の科学研究費（基盤研究 C）に応募した。研究課題名「イギリス文学は慈善をいかに描いてきたか——19 世紀半ばから 20 世紀初頭を中心に」として、2026 年度までの 5 年計画で採択されている。